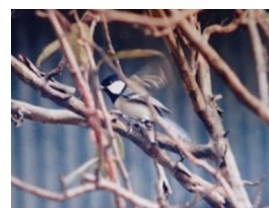


集まる利益

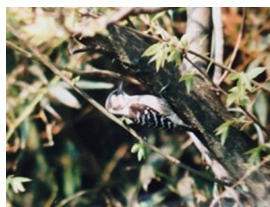
1. カラの混群

早ければ8月下旬くらいからエナガ(No.100参照)の集団の中にシジュウカラ、ヤマガラ(No.59参照)、メジロ(No.55参照)、コゲラが混じった群が採餌しながら移動していくところに出合います。これらは年中打吹山で見られる鳥ですが、年によっては山地からきたヒガラ、コガラ、ゴジュウカラなどが混じっていることもあります。種数の多いカラ類の名をとり、異種の混じった群という意味で「カラの混群」とよばれています。春、繁殖ためペアで行動するようになるまでは、終日同調した行動をとります。毎日、同じねぐらからほぼ同じコースを辿って動くため、決まった時刻には大体同じような場所にいることになります。

構成員数は、打吹山ではエナガが最も多く、次いでメジロ、シジュウカラ、ヤマガラの順です。先頭をいくエナガの「ジュッ」「ジュッ」という声が目印になります。キツツキ仲間のコゲラは一番最後で、「ギイー」という声と「コン」「コン」と幹や枝を叩く音で姿を確認することになります。



シジュウカラ



コゲラ

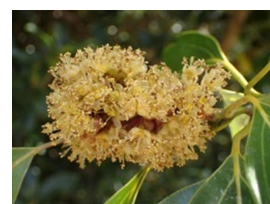
餌の奪い合いで競争にならないかと思われそうですが、うまく「食いわけ」になっているようです。エナガは枝や芽についたカイガラムシのような小さな虫を食べ、シジュウカラは毛虫や尺取り虫のような幹にいる大きめの虫や地上の落ち葉の下にいる虫、ヤマガラはシイのような硬い実、コゲラは枯れ枝の中の虫というように食べる場所やものが異なっているのです。先頭のエナガがどんどん進むので食べつくすことはなく、毎日同じような場所で餌がまかなえるようです。

集団が大きくなることは、周囲を監視する目が増えることを意味するので、小鳥を狙う猛禽チョウゲンボウなどの発見が早まり、安心して採餌できることが集団を作る利益だといわれています。

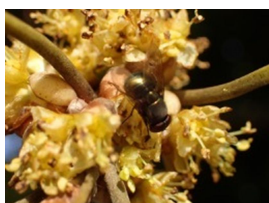
2. シロダモの雄花(No.59 参照)

雌雄別株のシロダモは秋遅くに開花します。ほとんどが春開花のクスノキ科としては異例です。目立たない花はクスノキ科の特徴ですが、黒ではなく赤い果実をつけるのはカゴノキとシロダモだけです。

花は葉腋に集合して付き、個々の花は花卉も小さく小型なので、全体は花束のような感じになります。節間(葉と葉の間)が詰まっている枝の先端部分は大きな塊です。この花には昆虫がたくさんやってきます。冬眠前のハエ・アブ類やハチ、チョウ類です。花粉ではなく蜜がお目当てと思われるが、この時期の花はウコギ科のキヅタ(No.117参照)くらいでヤツデにはまだ早い時期ですからお客が集中するのでしょう。



雄花



雄花にきたハナバエ

円錐状に集まった複合花序のウコギ科は花が目立ちますが、シロダモは小さく、地味であるため枝という枝に花をつけることで虫を呼んでいると考えられます。そのためには光をたくさん受けて物資を貯めなければならないので、ある程度大きくなった木か、林縁の木でなければ花をつけることができません。

花冠が小さく目立たない花をつける樹木の多くは、ヤナギやクルミのように穂状花序に多数の花を集めて目立つようにしています。多くの花を作ることと目立つ大きな花卉にすることはどちらが有利なのでしょう。進化の結果は、ランの仲間が示しています。